

『アフリカ安全保障論入門』

落合 雄彦 編著

国際領域 主任研究官 田澤 裕之



『アフリカ安全保障論入門』
編著／落合 雄彦
出版年／2019年
発行所／晃洋書房

本書は、今日のアフリカが直面する多様な安全保障上の課題について、平易かつコンパクトにまとめて紹介することを目的としています。編著者は、アフリカの安全保障課題が「紛争だけではない」という点を強調し、食料安全保障も含む多岐にわたる問題を取り上げています。これについて、「21世紀のアフリカは、武力紛争だけでなく、多種多様な安全保障課題に直面、(中略) 今日のアフリカは『紛争だけではない大陸』とでも形容すべきような不安定な過渡的状况に陥っている」と述べています。

本書では、「安全保障」という言葉が単なる軍事的な意味合いを超えて、国家、食料、経済、保健、人間などの領域に至るまで、広範な視点でアフリカにおける事例を網羅しています。構成は6部、21章からなり、各部がそれぞれ異なる視点からアフリカの安全保障にアプローチしています。

第Ⅰ部では軍隊・警察など、武力を合法的に保持し行使する組織について述べられています。アフリカにおける軍隊・警察の重要性について、主権国家の正規の武力を行使する組織として、主権国家体制が続く限りアフリカの安全保障における主要なアクターであり続けるとしています。

第Ⅱ部では、国家が平和と安全を維持し、国民の生命を守る責務について解説しています。

紛争、崩壊国家、国境問題といった、安全保障に対する国家の在り方について述べています。

第Ⅲ部では、テロ組織を非合法的な武力集団として取り上げ、海賊やボコ・ハラム、アル・シャバーブ(本書では「シャバーブ」と記述)を事例に挙げて考察しています。これら非合法武力集団が生まれる背景には、当該国・地域における法の支配の欠如や貧困、教育機会の不足、公権力の腐敗等があり、軍事的対抗措置だけでなく、政治・経済・社会的な要因の解決に向けて地道に取り組むことが求められるとしています。

第Ⅳ部では、域外アクターとの関係に焦点を当て、欧米諸国(米国・フランス)やアジア諸国(中国・韓国)、国際機関(国際連合・国際刑事裁判所)との関係を分析しています。

第Ⅴ部では、アフリカ連合(AU)や地域経済共同体(RECs)など、アフリカ大陸内の地域統合機関による安全保障を検討しています。

第Ⅵ部では、人間の安全保障や食料安全保障、食料主権といった、人間の生命を守るための安全保障の視点が扱われています。特にアフリカの食料安全保障では、地域レベルで干ばつや紛争に起因した飢餓や飢饉の問題が注目される一方、主食作物(小麦、とうもろこし等)と主食にならない換金作物(コーヒー、カカオ、綿花等)の両立について言及しています。基本的に多くのアフリカ諸国は、主食作物の不足に起因する食料輸入に依存する傾向に据え置かれています。

アフリカの食料安全保障は時代とともに変化しており、本書では食料主権という概念を、食料の量だけでなく質や選択の権利を重視するものとして説明しています。食料の質に関する新たな課題として本書では触れられていませんが、一部のアフリカ都市部で栄養不良による肥満傾向がみられます。一方、企業の経営の大規模農家と小規模農家の収入格差や農地の収奪といった問題も依然として存在しています。

事実、現在の南アフリカ共和国のように食料自給を達成し、大規模農家が余剰作物を輸出に振り向けている国もあります。例えば同国は、とうもろこし(約360億円)、果実類(約40億円)、ワイン等アルコール飲料(約20億円)などの農産物・加工品を我が国へ輸出しています(2022年)。また、南アでは4人に1人が肥満といわれており、砂糖入飲料税の導入などにより肥満解消への対策を進め、関連疾患による社会保障費負担の増大を抑えようとしています。

本書は、多角的な分析を通じて、アフリカの安全保障を深く理解するための有用な資料となります。あわせて、アフリカの安全保障に関する多様なバックグラウンドも理解することで、アフリカの食料安全保障についての検討にも役立つ内容を提供しますので、関心のある方は一読されることをお勧めします。